

1923年 (大正12年) [19歳]

「辰雄日誌1923」No. 3 (3)

—— 1923年11月1日～30日 ——

小池辰雄

○1923年11月1日 (木)

曇風。数日来のなまあただった天候は、今日の風と共にややしめられた。晩秋の気が漂うて来た。11月、その響きは何となく嬉しい。11月、何だか収穫のある様な感じのする声である。神様が赦して下さって、僕の、小鳥が巣立つが如く舞い昇るときが来たのではないかしら。屹度そうなんである。正しく然りなのである。

今晚、外では野分の音と虫の残声。机の廻りには本と火鉢、時計とインク。それから愛するホイットマンとコスモス。と、丁度時計が9時を指す。それでは是から東京の母様と御一緒に心からのお祈りを捧げまつらん。総ては聖旨に、総ては聖手に、かくてこそ日々は楽しく感謝にて。今日の歩みを感謝して、明日の歩みの更に確かならんために。

恩師佐藤先生、震災後、火災に罹られ、お気の毒なため寄付金の募集の通知が来た。今日、大奮発をして5円の送金をした。学生の身なる僕には、大分重くあつたが、病気をしなれば薬代の5円位は出来るわけであるからと思つて敢えてした。奮発して気持のわるいことはない。先生が僕の心を察して下さればいいんだが、3円と思つたが5円としたところを。とにかく先生のためには惜しくない。卵若干と人参規那葡萄酒を買った。健康のも少し回復するまでと思つて。

「わが兄弟よ若しなんじら各様の試誘に遇わば之を喜ぶべき事とすべし。蓋し
なんじらの受くる信仰の試みは爾らをして忍耐を生ぜしむるを知ればなり」
(ヤコブ1・2・3)

神の聖旨は深き哉。更に更に、しっかりと聖旨を行わしめ給え。アーメン。

〔室の照明電球と机上のホイットマンの額とコスモスの挿画あり〕

○1923年11月2日 (金)

暖風、曇、夜雨。高等学校で大いにやりたいこと、希望、抱負は英語と独逸語の力をうんと養うこと。それからもつと大事なこと。頑丈なルーテルの様な、リヴィングストンの様な、リンカーンの様な、グラッドストーンの様な、精力絶倫な身体を鍛え上げること。

兄上様より御手紙を戴く。僕の健康の勝れざる、余りに長き間、ぐずぐずしているこの身体のために、激励、叱責の辞を戴く。身を刺す様な言辞。意気地なき弟を見ては、はがゆいことであろう。総て、有難く承る。兄よ、ただ忍ばれよ、僕が叫ぶまで。沈黙と祈祷



に沈まざるを得ないこの身をあわれみ給え。神は守り給う。

神は我が牧者なり、我、乏しきことあらじ。

アーメン。

○1923年11月3日(土)

晴、満天の星。明治神宮鎮座祭。昨日の兄上の御手紙の一節、

「二体、君には我張りが足りない。腕一つで立つて行かなければならない前途を有しながら何時迄ぐずぐずして居るのですか。……」

「もつと心の底から考え直して体を作る決心をなさい。病気なんか飛んでしまいます。……血気盛りの男として意気地なき事此の上です。もつとしつかりなさい」

僕の今迄は全くその通りであつた。兄のこの言、正に然りである。故に一言の返答もない。ただ涙に咽ばんとするのみである。しかし、僕も謝するばかりの男でない。必ず目に物見せてくれんずと云うものある男である。兄よ、故に喜ばれよ。今暫く僕のために忍ばれよ。時は到らんとしている。棄てたくまで思われるこの弟が何になるか、それを忍びて待たれんことを切に願う。

母上の御手紙のところどころ。

「今日はお目出度い日です(天長節)。……辰雄にしては徒らな思い煩いをせず、規則正しく寢食、運動、睡眠をとり、焦らず急がずに日々の課業を学び心豊かに……藤井先生の仰せの如く凡てお任せして其の日暮らしがよいのです……己れの使命に向かつてつとめると云うにも力、強さがなくてはなりません。ただ悪いことをしない、正しく歩むと云うばかりではいけません。本当に心の底に力強い確かりしたものがあつて歩むのが大切だと思います。辰雄には此の点に大いに神の御力を戴かねばならないと思います。母様はそれをお祈りいたします(感謝致します)。正道を歩むにも強く歩まねばなりません。徒らな思い煩いは実に愚の骨頂ですが、それはグチと弱さとから来ると思えます。……日々其のベストを尽くして他に心を労することは本当におやめなさいね。神様にお任せてして強くおなりなさいよ。母上もそれをお祈りしお願いします。……何でも急によくなろうとすれば却つて仕損じます。徐々に積み上げるのです。辰雄の健康とても徐々に積んで行くのです。

10月31日」

母の温情溢るるお手紙。言々有難くうかがう。心に蔵めて、しつかりと歩もう。

今日、吉原の叔母様から御返事を戴く。此度の赤ちゃんの名は、敬^{ひろし}さんと云われるとのこと。好い御名である。前が礼ちゃん。吉彌さんに敬礼であるなどと冗談を想像させられた。

今日は2時間の授業。11時まで遊んで帰った。午後からは記念日の講演会へ行つてグンデルト先生の講演を聞いた。一時間余りに亘つて「余の大震災に対する所感」と云う題で。



かなり共鳴する演説であった。しかし、もう一步と、僕には思われた。しかし一般の日本人にはあれまでは言い得ない。やはり、敬神、宇宙を統べる大なる力の前に人智の小を投げ出して、平伏する心ある人の演説であった。人の最も真面目、どん底に立ちかえるときは、平伏、沈黙、而して祈祷である。日本人のその最も人間らしき心に欠けているは残念である(先生はかくは云われなかったが)。演説中「総ては善である」の語を聞いたときは、然りと答へざるを得なかった。

「地震もよし、火災もよし、春の花もよし、……もよし、然り！ 不平、不満、否定にあらずして、感謝、満足、喜悦、是認であらねばならぬ。もう一步強きことを(演説の)欲した。深きことを欲した。先生にそこまでの考えがあったかは知らないが、一般の聴者にはかえってあれくらいでよかったかも知れない。

日本人はあわれである。聴者中には、あきている奴が多かったらしい。それだけ真面目な心に立ちかえれないのが多くの日本人の様である。猪口才、浮気、薄情、は日本人の特色か。先生が僕のあの地震の当日、感謝の祈祷を捧げたのを知られたならば、さぞ喜ばれたことだろう。

今晚から桐寮は5人となった。林が入って来た(林、芳賀、四郎ちゃん、宣ちゃん、僕)。夜、散歩に出掛けた。オリオンが10時半頃に東に上る頃となった。また冬が来た。

今日、高島様のまま様から御手紙を戴いた。

「……何卒、根治あそばします様、念じてあげて居ります。……辰雄様は本当に選ばれた方と喜んで何卒お父様の御ふところ到现在にいつまでもと願って居ります。北京も御祈り下さいます。藤井先生も助けて下さいます。本当にうれしさの極みであります。……辰雄様も多勢の方々の中に在りて何卒しつかりと大きい御手の中にいつもいつも在らせらるる様念じてあげ居ります。……辰雄様も何卒私の為に祈り下さいませ。……明後日はまた聖日であります。今日も善き金曜日まことに感謝のみにあります。何卒、御父様の御恵深くあらん事を。」

11月、恵まれたる月である。僕の立つべき真の時が来た。神によりすがりて、しっかりと進み、この時を逸してはならぬ。罪は赦されぬ。されば勇み進め。

たてよいざたて	主のつはもの
みずやみはたの	ひるがへるを
すべてのあだを	ほろぼすまで
きみはさきだち	ゆかせたまはん。
たてよわが主の	ちからにより
神のよろひを	かたくまとひ
みたまのつるぎ	うちかざして
おのがもちばに	いさみすすめ。

○1923年11月4日 (日)

晴天。起床7時半。冷水摩擦。ミルトンの詩を若干読んだ。難しい。ラテン語の詩が読める様になるのは何時のことかしら。速くなりたいものだ。キャッチボールを少しやったらお昼になった。胃のために軽くとった。それから、兄上へ御手紙を書いた。6日に演習に出かけられる由。その前に到着せしめたい。そこで、駅のそばの水戸郵便局へ行つて出すことにした。自転車を隣から借りて、出た。ビュービュー飛ばした。幸い人通りも少なく気持がよかった。駅まで行った。なお、どこかへ行きたくなつた。そこで車頭を千波沼へ向けた。長い橋を渡つて小川に沿つて走らせた。晩秋の景趣は如何にも心をすーつとさせる。行ける所までと思つてかなり南へと入つていった。水車の廻っているところ、農夫の草を刈っている処、小児が2、3人小川で何やらバチャバチャやっている所、如何にも田舎気分たっぷりで心地がよかった。更に面白い場面は、4、5人の農夫の娘が鍬、鎌を休めて、焼芋を美味しそうに食しているところであつた。神聖なる労働の中休みに太陽の下で草の上で焼芋（これも畠に賜つた天然の食）を持つて団欒。かかる処にこそ楽園はあるのである。僕にして若し画家ならばこれを描いたら、もし詩人ならばこれを歌つただろう。

僕の心に浮かんたことがあつた。それは何であつたか。僕をここまで自転車で導いたものはなんであつたか。僕は知らなかつた。しかしあるものが為し給うた。その心に浮かんたこととは何であつたか。それは祈祷であつた。祈祷の場所であつた。僕は十字路へ出た。自転車をそこに止めた。左なる小路を歩いた。小路はやがて僕を小高いところへ導いた。そこには小さな草の原があつた。人は通らないところであつた。此処ぞ、神の与え給ひし祈祷の処ぞと僕はその草原に分け入つた。僕の身体は全く草の間に没した。人は通らず。天と地と草と虫とただこれだけが僕の周囲であつた。僕は声を発してお祈りをした。心に迸ることを総て祈り上げた。何分析つたかは知らない。短くはなかつた。祈りの途中に沈黙に帰ることもあつた。それは聖旨のお答えを待つためであつた。右の頬は蚊に刺されてかゆかつた。しかしそれどころではなかつた。切なる祈りのために身体は地面にめり込みそうであつた。神様、お父様は確かに祈りを聴いて下さつた。嬉しかりし時、感謝なりし時、樂しかりし時とてこんなときはないのである。記念に傍らに芽をふき出していた松を一本抜いて持ち帰つた。自転車の下の方で僕を嬉しげに待っているのが見えた。再び打ち乗つて小川に沿つて快く乗り戻つて来た。小川の何と美しいこと、その真砂の如何に美しいこと。汽車の踏切は行きも帰りも開いて居て都合がよかった。ペダルを廻す足も軽げに戻つてきた。

帰途、みやこ湯へ立ちより入浴をした。空いて居て気持がよかった。目方は相変わらず9貫5百匁(約35.6kg)であつた。これが僕の身体の礎である。築き上げるのは之からである。帰寮、早速、松を鉢植にした。

感謝なる安息日であつた。晩に安息日聖守を破る行為をせざるを得なかつたことは残念



であつたが、お赦しを乞うよりしかたがなかった。9時には庭先へ出て、虫の歌を聞きながらお祈りであつた。

今月の22日は米国の「Thanksgiving Day」〔感謝祭〕に当たる。また僕のサンクスギヴィングデーでもあらんことを祈り奉る。22日は兄上の天国へ召された日である。帰京してよき日を送らしめ給わんことを。そして、来月に迫っているクリスマスよ。僕の最初のクリスマスである。楽しきクリスマス。感謝なるクリスマスの我が家に迎われんことを切に祈り奉る。

○1923年11月5日(月)

快晴。珍しく温かい日であつた。日中の快き言わん方なしであつた。聖手に引かれて暮らす身の感謝なることよ。願わくは、いつまでもいつまでも御懷にありて暮さん^{すじ}ことをと思うのであつた。徐々にてよろし、僕の身体は回復し行く。躓くなかれ、ゆつくりと、しっかりと。

「信仰と健康」より、内村先生。

「肉体の医さるるのを見るまでは神の存在を信じないなど云う人は、その医さるるのを見ても信じない人であります。先ず内なる靈魂を医し、然る後、内より外を医し給うに相違ありません。これ実に根本的平癒でありまして、斯く医されてこそ疾病は反つて私共の永久の利益となるのであります。肉体の健康のために平静なる精神の如くに有益なるものはありません。怨恨なく不平なく、常に歓喜の念に溢るる者は其の肉体は病むと雖も、病苦を多く感じないものであります。欲しきものは心の平和であります。

「心の快楽は良薬なり、靈魂の憂愁は骨を枯らす」(箴言17・22)

信仰は直ちに身体の疾病を癒しません。然しながら直ちに心の錯乱を治す者でありますから、それがために竟には身体までが健康になるのであります。

信仰は第一に心の統一を来たします。

神を信ぜざる者は自家撞着の人。彼の右と左とは一致せず、彼の情と道理とは常に相争つ。彼は為してはならぬと信ずることをなす。為すべきをなさず、主義を以て之を実行せず、常に薄志弱行を以て自身を責む。

ああ、之等の先生の言は一、一、僕の過去に思い当たることあり。宛も僕のために書かれたるが如く感ぜられる。^{あたか}

彼は、聖書に所謂「相争つ家」であります。彼の敵は実に他人に非ず、彼自身である。斯くも内心に於て相離背する彼の身に真個の健康のありよう筈はない。彼は内心の分離に日夜苦悶する者である。然るに信仰によりて此の分離は癒され、調和は人の心に臨みます。……彼に彼の理想を断行する勇氣が与えられて、彼は今は実行の人となります。彼の情は潔められて、彼は今は想つべからざることを想わないようになります。内心の統一は新希望を生じ、果敢勇行となつて外に彰われます。



信仰は第二に神に頼る心であります。神の好み給つものはただ我等の砕けたる小兒の如き神に依り頼む心であります。人に汲まるれば汲まれるほど愛と好意と同情との清水を何の苦情をも唱えずして悦んで供給することが出来ますよつになります。神に頼らずして此の無慈悲なる世を渡ることは実に辛いことですが、然かし神を信じて之に対しますれば此世は左程に辛い所ではありません。

基督信徒とは全智全能なる神を信する紳士である。

The Christian is God Almighty's gentleman.

神を真誠に信するの結果が人に紳士的態度を供しますことは事実であります。

彼は信仰によって狡猾い性質を脱します。人を疑わなくなりします。人の悪を思わずして、善を信するよつになります。彼は迫らない、憤らない人となります。

平静なる心。全智全能の神との交通、信頼。信仰は第三に精神の活動でありますから、之を得て人は其の身の中に於て新生命を得るに至ります。」

「我が汝等に曰いし言は靈なり、生命なり」(ヨハネ6・63)

今日、学校の帰途、畠の間を縫つて来た。老農夫が犁^{すき}で土をこなしていた。彼に2、3の言辞をかけて、彼等の労を察した。耕作のことも少し聞いてみた。ポケットに残っていたピーナッツ3個を彼にやった。彼は丁寧に帽を脱いで受けた。彼はすぐ我が家へと急いだ。恐らく子供と共に、子供に与えんか、にて帰つたのであろう。その場で食するほど卑しくなかった。益々感じさせられた。やがてまた丁度、甘藷を握っている農夫の側に来た。撰りたてである。彼からその大なる一つを貰った。人工のピーナッツを棄てて、天然のサツマイモを得たるを思つたとき、僕の心は言うに言われず清くあつた。自分で煮て、夕飯のとき皆と共に貴き一本のサツマイモを美味しくわち食した。何とも云えぬ美味であつた。10時半、消灯。

○1923年11月6日(火)

晴。今日は発火演習があつたが、僕は行けなかった。鉄砲を担いで5里(約20km)位歩き廻る身体になりたいものである。午前にはテニスを少しやった。午後は家に居た。夕方、3人で入浴した。食欲がそうない。胃はなかなかである。忍耐を要する。

○1923年11月7日(水)

雨。久しぶりで雨が降った。今日は、演習の翌日といふので2時間しか授業がなかった。今日土曜(半どん)で、昨日は日曜、明日も先生が休まれるので土曜も同然。金曜だけちゃんと出れば、その翌日10日は土曜日、また日曜で、結局、今週は楽である。身体のしつかりしない僕には有難い。

僕の胃はやや慢性の傾向がある。徹底的に根治しなければならぬ。非凡なる忍耐を要



する。忍耐力、それは神様から戴くものでなければ到底なし得るところのものではない。ルーテルの忍耐、ゴルドンの忍耐、リヴィングストーンの忍耐、其れは人のなし得る忍耐でない。神の御力による忍耐である。

僕は、神の愛し給う人である。何日でも好い、何月でも好い、何年でも好い、それは神様におまかせ致すのである。忍耐する。有ゆる試練を飲んで受ける。身体の強健を待ちのぞむ。幸福は神と共に在ることである。神様が与え給う故に、この身体で満足し感謝し奉るのである。

兄上から御手紙を戴く。僕も忍びて、且つ歡び安んじて上京の日を待つ。明後日は母上の55回目の御誕生日である。その翌10日はルーテルの Geburtstag〔誕生日〕である。ああ、11月よ、汝よ、願わくは、僕を充分育みられよ。

○1923年11月8日(木)

晴、北風。起床7時10分前。昼食をとり桐寮へ帰つて来た。母上様から御手紙が来ていた。有難く拝見した。姉上様には未だお目出度の模様なしとのこと。しかし、今度僕が上京するときまでには、あることであろう。是もまた楽しみである。今日もまた、よき忍耐の日を戴いて、しっかりと。去年、南先生から戴いた処方薬を作ってもらった。冬空めいてきて、風も皮に沁む。

「⁹後に『視よ、我なんじの御意を行わんとて来る』と言い給えり。その後なる者を立てん為に、その先なる者を除き給うなり。」(ヘブル10・9)〔英文〕

「¹⁰汝はわが神なりわれに聖旨をおこなふことををしへたまへ。恵ふかき聖霊をもて我をたひらかなる國にみちびきたまへ」(詩篇143・10)〔英文〕

就床10時過ぎと定めた。10時半まで。母上様とお祈りをする時間は10時と定めた。母上様からの御手紙により。

「⁶汝ら心を強くしかつ勇め。彼らを懼るる勿れ。彼らの前におのにおそくなかれ。其は汝の神エホバみづから汝とともに往きたまへばなり。必ず汝を離れず、汝を棄たまはじ」(申命記31・6)〔英文〕

我がつとめ。我がいのち。

起床 7時、冷水摩擦。

聖書 日々の力、朝食。

登校 運動若干、精力善用。

昼食 新聞。

登校 運動若干、入浴。

勉強 1時間(主に予習)。

夕食 休息、讚美歌。



7時より9時まで 勉強、復習補充(主に独逸語)。

9時より10時まで 聖書とすること、日記と書翰。

10時 お祈り。

10時少し過ぎ、10時半までには就寝。

神の御懷にて安らけく翌日起きるをゆるさるるまで。聖旨に従い、聖手に引かれてその日その日を安らかに。

○1923年11月9日(金)

快晴。母上様の御誕生日〔1869年11月9日〕。早起、戸排す。朝暉の光がサツと射し込んだ。全身に日の光を浴びて冷水で身体を摩擦するのは実に快なるものである。好い天気、ああ気持が好い。好い日だと叫ばざるを得なかった。

時間と時間の間の10分間休みにはキャッチボールを演^やった。手前に3回あるから、それでも好い運動になる。お昼には帰つて来る。日^{ひな}当^{あた}ぼつこが好い気持である。放課後、キャッチボールを40分位やり、それから自動車で赤塚付近まで行つた。夕暉と西の空と遠山、その情景は何とも言えない美しいものであった。畠の大根の葉も生々としている。空気は清澄。田舎なり、自然なりと嘆美した。夕食もおいしく戴く。御馳走はなくとも。

遙かに母上のためにお祝ひした。正に55回の御誕生日である。散歩に出掛けた。マントが必要になってきた。茶菓子を喫するけれども、僕は間食廃止を要する身体故、皆の仲間入りは出来ないが、ちつとも誘惑されなくなった。

○1923年11月10日(土)

晴。ルーテルの誕生日(1483年)。昨日は好^よき日であった。今日も好き日である。昨日も晴れ、今日も晴れである。僕が桐寮の早起者となった。井戸水を、起き立てに汲むのは何とも言えない気分のするものである。自転車^{自転車}を約1時間乗り廻した。

昨晚の夢は何であつたか。それは実に慕わしきものであった。内村先生にお会いした夢である。ルーテルの生まれた日の昨夜、先生にお会いした夢を見る。何か因縁がありそうである。

夜は、独り桐寮に居た。『宗教と現世』を繙いた。「青年に告ぐ」の章を読んだ。音読した。基督教は先ず第一に靈魂の疾病を癒すの宗教である。其の第一に各人に向かつて教えんと欲することは、汝は罪人の首である、ということである。ここに至つて、自分の心に電光が閃いた。雷に打たれた感があつた。机に平伏してしまった。

頭を再びあげた。ルーテルが睥睨^{へいげい}していた。正しくルーテルの声がそれであつた。「汝は罪人の首である」と。読み終つて、決然と立った。同時に僕の心に告げるものがあつた。

Die Bibel「ルーテルの聖書」これを汝に与えんと。正にルーテルの誕生日に当たつてこの



靈感を得たのは偶然の出来事ではない。早速、洋服を来て、飛び出た。星が輝いていた。足は進む、勇み行く。川又書店にただ一冊あったことを記憶している。嘗て瞥見したその書は今晚、僕の手に入るのだと思ったとき、言うに言われぬ嬉しさを感じた。水戸であの一冊の黒い無言の書を買うものは僕の外になかったのであった。僕のために、僕のためにであった。感謝するも余りあることである。ベルリンから水戸の僕のために、かの書は来ていたのである。我がルーテルよりその誕生の晩に、聖書を授けられた。神様よ、御聖旨誠に感謝し奉ります。願わくは、しっかりと御導きあらんことを。聖手にすがりて。

〇1923年11月11日(日)

快晴。主の日。

From my brother in Heaven. "Courage, Brother" [天のわが兄上より、「勇気を、兄弟よ」]

〔フーマン・マクロード (1812～1872) 作詞の讃美歌〕

1 Courage, brother! do not stumble,
though your path be dark as night;
there's a star to guide the humble:
trust in God, and do the right.
Let the road be rough and dreary,
and its end far out of sight;
foot it bravely; strong or weary,
trust in God, trust in God,
trust in God, and do the right.

〔勇気を、兄弟よ、
あなたの道は夜のように暗いですが、
謙遜さへ導く星があります。
神を信頼し、正しいことをしなさい。
道は荒くて退屈ですが、
その終わりは遠く見えませんが、
勇敢に足を踏み入れなさい。強くても疲れていても
神を信頼し、神を信頼し、
神を信頼し、正しいことをしなさい。〕

2 Perish policy and cunning,
perish all that fears the light!
Whether losing, whether winning,
trust in God, and do the right.
Some will hate you, some will love you,
some will flatter, some will slight;
heed them not, and look above you:
trust in God, trust in God,
trust in God, and do the right.

政策と狡猾さを滅ぼし、
光を恐れるすべてを滅ぼしなさい！
負けても、勝っても、
神を信頼し、正しいことをしてください。
ある人はあなたを憎み、ある人はあなたを愛し、
ある人はお世辞を言い、ある人は軽視します、
人をやめ、あなたの上を見なさい。
神を信頼し、神を信頼し、
神を信頼し、正しいことをしてください。

3 Simple rule and safest guiding,
inward peace, and inward might,

単純なルール、そして最も安全な導き、
内なる平和と内なる力、



star upon our path abiding,
trust in God, and do the right.
Courage, sister! do not stumble,
though your path be dark as night;
there's a star to guide the humble:
trust in God, trust in God,
trust in God, and do the right.

私たちの道を歩み続け、
神を信頼し、正しいことをしてください。
勇気を、姉妹よ、つまずかないでください、
あなたの道は夜のように暗いですが、
謙遜さへ導く星があります。
神を信頼し、神を信頼し、
神を信頼し、正しいことをしなさい。(編者訳)

午前9時、3人で出掛けた。自転車の遠乗りを企てた。長岡へ行き、長岡から下市へ南行し、下市から上市の桐寮へと三角形を描いて行程5里、2時間半の遠乗りを演った。初めてであった故、愉快であった。しかし、かなり疲労した。沿道の景色がよかった。天気絶好であった。夏服で行って、汗が出る位であった。お昼御飯は非常に美味しかった。パインアップルの缶詰が素敵だった。お昼すぎには2時間程、障子にポカポカとした日を受けてお午ねをした。晩はしずかにすごし、10時に就寝。

ルーテルからの聖書、創世記第1章を少し読む。日本語のと対照しなければ読めないが、愉快である。

○1923年11月12日 (月)

晴。起床7時、井水を汲む。午前は好い天気であった。午後、放課後、文一甲二対文一乙の蹴球戦があった。文一乙の勝、練習を少しもしないでよく勝った。1対0。勉強に実が入り11時までやった。不規則はよくなかった。母上との音信はたのしみである。

○1923年11月13日 (火)

晴、弦月。曉霧が低くたれこめて、細雨が降っている様であった。午前はあまりいい天気でない。午後からは非常な風であった。フットボール、グラウンドに石炭殻まきの労働を進んでやった。グラウンドのための催人は、よく働くよき男である。彼の如き正直な人間が貴い。彼を招いて御馳走でもしてやりたい気がした。独りならばと思うのである。夜に至って風風ぎ、月夜であるので散歩に出掛けた。今日は殆ど無為に過ごす。

○1923年11月14日 (水)

快晴。天は晴れたり。大気は澄みぬ。畠は青し。山は清し。水は清冽なり。この天地に人あり、罪人あり、我あり。我は顧みる、20年の過去を。罪また罪なり。肉また肉なり。神よ赦し給え。我は地に就けり。今より後、天の子の如く歩ましめ給え。神よ赦し給え。総ての大なる罪も小なる罪も。我がかくなれるは皆、御聖旨と知るが故に赦し給え。全て聖手にゆだねま



つりて、何も思い煩うことなからん。

神よ、かるが故に、御憐憫を垂れ給え、救い給え。主はわがために、十字架はわがために。ああ。主によりて起たん。主に在りてのみ生命なり。何も思い煩うこと勿らしめ給え。

○1923年11月15日(木)

晴。かなり寒くなった。今日は理科の発火演習の日。帰宅するころ、北の畠に彼等の影の黙々として動き来るのが見えた。身体に心がひかれて、運動も勉強もよく出来ない。

○1923年11月16日(金)

桐水会を催した。集まるもの12人。場所は鰻屋である。僕は、お腹のために行けなかった。帰りに桐寮で遊んで行くというので、火鉢、皿、湯の類を揃えて待つ役になった。9時近くに皆はやつて来た。赤い顔の彼等を見て、あまり好き感を抱き得なかった。酒を呑むのを別に何とか云いたくないが、会というものには酒がなくちゃあ、なんて云う心から、こは気になってやったのだとすると、僕は賛成したくない。どころか、彼等は我が敵であると強く言いたい。殊に、四郎君、宣彦君の飲酒者の仲間なるを見ては、やや嬉しからぬところがある。「へボのけ」「銭廻し」「ジェスチャー」などをして遊び、お茶を飲み菓子を楽しみ、喋舌り、で、夜の1時まで騒いだ。愉快ではあったが真の愉快は僕には得られなかった。それでも附属の連中だからいいのだろうと満足するよりほかない。

○1923年11月17日(土)

晴、寒気厳し。朝から非常な寒さである。今までで一番寒い。それでも夏服を着て、「そんなでもない」と云っている豪傑が居る。彼の如き身体が欲しい。羨ましきは健全なる働ける身体である。神様は、僕を大いに使い給うために、今にその身体を賜うことと信ずる。かく思つて僕は更に幸福なる身体である。昨日夜更かしをしたため、今日は一日、頭がボヤツとして気分が冴えない。睡眠不足は非常な身の毒である。ことに今の僕には害である。

今晚も、だべりに来たものがあつて、うるさかった。彼等の言うことは実にくだらない。時間の徒費と、精力の乱用と、彼等の心を腐らし、頭を鈍らせ、品性を下落せしむるものはこのくだらぬダベリというものである。こんなおつきあいはまっぴらである。おつあいをしないとして、憎まれたつてかまわない。悪魔、凡俗腐敗の分子となるよりも、憎まれる方が遙かに幸である。四郎ちゃん、宣ちゃんが追々それに染みつたあるを見て悲しまざるを得ぬ。自分では自覚して、ほどほどと思つてゐるかもしれないが、それが凡俗仲間入りの第一歩をなしている。それで墮落はしまい。返つて、世間と調子があつて、よいこと(世間なみの)は多く身に降つて来て、幸かも知れない。人からは信用を得るかも知れぬ。そこが僕と全然、立場を異にするところだ。竟に僕の味方は一人も居ないわけだ。それでよい。



彼等は、やれ、文学とやら、政治とやら、芸術とやら、下つては女のことなどを論じたり、ひやかしたりしているが結局、空の空、俗の俗、泡の泡。何も知らずという顔をして黙っていて「無智談ずるに足らず」としりあに蔑視されている僕は、かえってそれで幸だ。彼等の快楽的な、現世的な肉欲的なのは全然ちがう。僕はどこまでも生命あるもの、真に愛あるもの、真の光あるものを目指しているのである。

母上様に御手紙を差し上げた。兄上様演習中、御手紙を下さった。祈りにて始まり祈りにて終る静けき安息日を待ちつつ。

○1923年11月18日(日)

雨。終日、降雨。久しぶりでしんみりした静かな安息日を過ごした。讃美歌、聖書のことば、その他、よきことばを常に身につけてありたく、一冊の小さなノートを買って来て作った。楽しんでこれに書き記した。好いノートが出来て嬉しい。「兄上の御写真」と「両兄と僕と三人」で滋雄さんにとって戴いた写真とをその本の第一頁に挿んだ。僕を慰め、励まし、力づけ、目覚ます友はこの書である。15日には讃美歌第二編を買った。この讃美歌を買った日から自^{じきよう}彊術を始めた。毎晩毎晩寝る前に。This is “my Book”, “my Friend”. 皮製(ノートのスケッチあり)。

○1923年11月19日(月)

晴。名残りなく晴れた。さっぱりした天気。痩せたる身体のために最善の努力。
玆に白日また来りけり、浪費さぜらん事を務めよ。

○1923年11月20日(火)

晴。不愉快なこととて、だべりすぎすに過ぎたるはなし。夢に迷う彼等のあわれさよ。
此の日永遠より来り、夜と共に永遠に去る。

○1923年11月21日(水)

晴。独逸語3時間。充実した日。帰寮、思い立って帰らんと、1時間内に支度をした。自動車待つ。遂に来らず。空しく寮に戻る。神の御意を察し得て、残念と思つた心は直ちに失せ、愉快に待つ。夕方、入浴に行く。十三夜の月が煌々と輝いていた。就寝8時。友達達の所へ騒ぎに来たものがあつたため、安眠妨害されて11時まで眠れず。思いやりも遠慮もない奴ばかり。うらみもしないが、彼等に温かき心の一片でも持たせてやりたい。

○1923年11月22日(木)

晴。Thanksgiving Day〔感謝祭〕。起床8時。ゆつくり支度をして、パンとオヴァルチン



の朝食を済ませて出掛けた。牛の歩みと云う位な暢気さで水戸の町を縦貫。駅に着いたのは10時10分前。30分位待つと汽車は出た。2、3の友達と共に来た。土浦で「わかさぎ」を買ってお土産にした。上野へ着いて驚いたのは、飲食店の実に多いことであつた。右を見ても左を見ても飲食店がずらつと並んでいる。最必要物のだろう。実によく売れるとのことである。東京の空気はなんとなくいやである。今日は、11月の第4木曜日、感謝祭に当たる日である。米国のこの日を憶えているものは一人もない様である。今日はまた、兄上の御命日である。去年の今日も思い出される。

帰宅したら、姉上は未だ分娩されない。吉原の叔母様が来て居られた。おきよ様がこの月の4日から来て居られたとのこと、姉上のために。それが未だなのでお気の毒。

○1923年11月23日(金)

晴、満月。新嘗祭。起床7時半。今日は朝、冷水摩擦の代りに自彊術をやつた。午前、神楽坂へ買物に行つた。

午後3時半、母上と共に武田へお見舞に行つた。戸山原で30分ほど名も知れぬ子供とトロッコをして遊んだ。何年昔へ帰つたことだろう、その打ち興じていた間は。武田の叔母様は段々お宜しい様なので安心した。実様、高文の試験不合格であつたとのこと、お気の毒の至りと、母上と色々御相談の様であつた。母上と満月を仰ぎつつ、夕方、家路を急いだ。お腹が空いたので、トロロの美味しかったこと、何とも言えなかつた。

○1923年11月24日(土)

雨。細雨が降つて居た。お使いに出掛けた。いくら捜しても見つからない。やや憤慨した。しかし、心をしずめねばならなかつた。表札もなければ何も便りがないから、一戸一戸その人が居るか聞かねばならなかつた。空しく帰つて出直した。武田へおたのみすることにした。帰り途、平口様へお寄りした。お母様がお亡くなりになつたとのことであつた。お悔やみを申し上げた。平口様は全くの孤独の身となられた。御同情に堪えない。

終日、降り続けている。お昼に母様の御誕生のお祝いをした。一家が集まつたからである。鳥の御馳走。非常に美味しかった。鳥鍋は何年ぶり、食べるのか知ら。家は何と云つても寮とはちがつて御飯が美味しい。炬燵の団欒は愉快である。入浴して、床に入る。母上、兄上、姉上のために祈り上げる。

○1923年11月25日(日)

「²⁴すべてエホバを俟望むものよ雄々しかれなんぢら心をかたうせよ」(詩篇 31・24) [英文]

「²⁷われ平安を汝らに遺す、わが平安を汝らに與ふ。わが與ふるは世の與ふる



如くならず、なんぢら心を騒がすな、また懼るな。」(ヨハネ14・27)〔英文〕

かなしむみたみよ おちまどふ友よ

こころをしづめて みちからにたよれ

「⁵その怒はただしばしにてその恵はいのちとともにながし。夜はよもすがら泣きかなしむとも朝にはよろこびうたはん」(詩篇30・5)

今朝の輝きの日を仰ぎて。 浄め給え。 With Great Thanks.

○1923年11月26日(月)

晴。東京牛乳は美味しい。パンがまたうまい。お昼の鳥のお露のお雑煮は実に珍無類だった。晩はオデンをいただいた。三越へ行った。流石是三越で、その景気は大したものであった。僕はもつと勇気を出さねばならないことを母上から承った。神経質である以上、身体は太らないこともよくわかった。思い切つて、かまわず屋、のんき屋にならねばならない。総ては之である。

「救いの御力は只一つ、己れを棄てることなり。忘れろ、棄てろ」
とささやく声がする。

○1923年11月27日(火)

晴。昨夜、散歩に出掛けて、何の気なしに薬屋に入つて「アヌゾール」〔痔の薬〕があるかと聞いて見たら、「あります」と云われて面くらった。それでは、「今お金を持っていないから明朝来るから、とつて置いてくれ」

とたので、半分赤くなつて出て来た。それを今朝買いに行つた。数日前から痔の気味で運動が出来ず、閉口しているのである。

10時50分の汽車で水戸へ帰つて来た。リュックサックに鞆に毛布の一包、随分重かった。夕食後、入浴して、肩の痛いのもとれた様である。

忘れろ！ 棄てろ！ Humble!〔質素に〕、Pure!〔純に〕。

これは今日車中で神様から直接に賜つた御言葉である。

○1923年11月28日(水)

雨。終日降雨。やや風邪気味。

A Stitch in time saves nine.

〔時を得た一针は九針を省く(今日の一针、明日の九針)〕

だから早く癒そう。もう秋も過ぎゆきなんとしている。木の葉も残ること僅かとなった。この頃も未だ地震がある。今年は地震の年である。世界の所々にあった。この冬は太陽の黒点との関係上、暖かいとのことである。



Work while you work. Play while you play. Sleep while you sleep.

〔仕事をしながら仕事をする。遊びながら遊ぶ。眠りながら眠る。〕

四郎ちゃんが昼、傘を持って来てくれた。彼の好意に感謝した。神の元気な子供となつて快樂に。

忘れろ、棄てろ、Humble! (こつまこつ) Pure! (清く)

それでは今日の日を感謝して、床に入ろう。

○1923年11月29日(木)

晴。昨夜の豪雨、名残なく霽れて、朝日に万象輝く。徹底せよ、神によりて強かれ。動くな、迷うな、落ち着け、と教えられる。肉を趁うものは肉によりて亡ぶ。汝の身の肉によりて滅びざらん様心せよ。

忘れろ、棄てろ、Humble Pure。

汝の瞬間瞬間に忠実なれ、それが神への最も善き奉仕なり。

○1923年11月30日(金)

晴。好い天気である。冬空である。日光の遠山に雪が降りている。緊張した凜々しい朝である。紅葉が実に見事である。時間中も緊張していい。ただ筆記は困る。

忘れろ、棄てろ、Humble Pure。

万事これで有難くある。十字架におすがりする間は、安らかである。故に強くある。辰雄は強い。忍耐するぞ、見よその結ぶ実を。である。

